

EVRI

教育ビジョン研究センター

ISSN-L(PRINT): 2435-8134 ISSN(ONLINE): 2435-8037

EVRI研究プロジェクト叢書 Vol. 5

Bulletin of the EVRI Research Project (Vol. 5)

定時制高校における主権者教育の 構造改革のためのデザイン研究





本プロジェクトにおいて想定する高校生像

絵：久保 美奈 作（広島大学大学院）

目次

1. プロジェクトの概要.....	1
1-1. プロジェクトの目的：エンパワメント格差の是正	1
1-2. 研究方法：デザイン研究.....	2
1-3. 研究連携校：兵庫県立西宮香風高等学校.....	3
2. プロジェクトに関わるセミナー・学会・論文発表等の一覧	6
3. 第1期デザイン研究の成果	8
3-1. 第1期から明らかとなったデザイン原則.....	8
3-2. 第1期の授業実践概要.....	8
4. 第2期デザイン研究の成果	38
4-1. 第2期から明らかとなったデザイン原則	38
4-2. 第2期の授業実践概要.....	38
5. プロジェクトメンバーによる自己省察.....	55
6. おわりに・謝辞	60

1. プロジェクト概要

1-1. プロジェクトの目的:エンパワメント格差の是正

本プロジェクトは、次の目的のもと実施された。

- ◆目的①：定時制高校の主権者教育の構造改革を通して、高校生間に見られる「社会参加におけるエンパワメント格差」を是正する。
- ◆目的②：「社会参加におけるエンパワメント格差」是正のための学校づくり・カリキュラムづくりをしていく上での汎用的なデザイン原則を明らかにする。
- ◆問題意識：社会参加におけるエンパワメント格差

上の目的を掲げた背景には、推察の通り「社会参加におけるエンパワメント格差」という問題意識があった。この「社会参加のエンパワメント格差」をより詳しく説明するにあたって、「社会参加」と「エンパワメント格差」を分けて考え、読者と問題意識を共有したい。

まず「社会参加」である。本プロジェクトで述べる「社会参加」は、「より民主的なコミュニティにしていくための市民による行動・計画・動機」と広く定義している。具体的には、投票することだけではなく、デモや SNS での発信等といった参加システムへ参加していくかを捉える概念として用いる。また、実際に行動しているかだけではなく、行動する際の自己の自信や参加する計画などの状態も「社会参加」として捉えている。

次に「エンパワメント格差 (Levinson, 2012)」である。多様な背景を持ち、しばしば学ぶことに意味を見いだせない子どもは、家庭・地域・学校での市民性教育の機会等に恵まれず、民主主義への参加から阻害されやすいとされている。こうした機会格差によって形成される社会は、多様な背景を持つ人々の声が欠如することになってしまう。このように、社会参加を巡って起こる、複合的・連鎖的な格差を「エンパワメント格差」と呼ぶ。

すなわち「社会参加におけるエンパワメント格差」は、家庭・地域・学校での市民性教育の機会が恵まれていない人々は、そうでない人々と比べて「私には、社会参加できない」「社会参加には意味がない」「社会参加したくない」という帰結に陥ってしまう構造的問題のことを指す。

以上の問題意識を、定時制高校でもある兵庫県立西宮香風の学校長である石川照子氏(当時)や数名の教諭に共有したところ、同じような問題意識を抱えていることがわかった。また、著者らによる事前調査からも、本現象が確認された。

こうした経緯から、兵庫県立西宮香風高等学校と研究連携を図り、以下の問いを立て1年余りの研究プロジェクトを実施するに至った。

◆本プロジェクト研究の問い

「社会参加におけるエンパワメント格差是正」のためのカリキュラムのデザイン原則とは何か？

1-2. 研究方法:デザイン研究

本プロジェクトでは、デザイン研究という方法をとる。デザイン研究とは「教授計画のベースとなるデザイン原則を提案し、授業を綿密かつダイナミクスに展開しながら、その評価を通してデザイン原則の見直しあるいは構築のし直しを行う実践研究方法論(大島, 2004)」という方法である。デザイン研究の特徴を三宅・白水(2003)や Freedman ほか(2019)を参考に、以下4点を示す。

- ◆特徴①:学術的な問題意識や理論を出発点に研究する研究
- ◆特徴②:教師と研究者がチームを組んで行う研究
- ◆特徴③:デザイン原則が有効であったかを検証する研究
- ◆特徴④:デザイン原則の修正を繰り返す研究

4つの特徴を意識し、筆者らは以下のチーム構成・スケジュールで研究に取り組んできた。



1-3. 研究連携校:兵庫県立西宮香風高等学校

◆ 学校概要

本プロジェクトは、兵庫県立西宮香風高等学校(以下、香風高校)との共同プロジェクトである。香風高校は、多様な生徒の幅広いニーズに応えるための単位制高校として 2001 年に開校し、現在 700 名余りの生徒が通っている高等学校である。

香風高校の特徴は、生徒が午前、午後、夜の3つの部に分かれて所属する多部制(3部制)を採用している点に見出すことができる。4月から9月までを前期、10月から3月までを後期とし、半期ごとに単位認定を行う。1年次の授業は基本的にクラス固定であるが、2年次以上は自ら授業を選択し、自分用の時間割を設定できる。生徒は自分のペースに合わせて3年から6年までの間で卒業をめざすことができ、9月卒業、10月入学も可能となっている。

香風高校の概要を紹介した石川(2019)では「勤労青少年をはじめ、自分のライフスタイルや学習ペースに合わせて学びたい者、全日制課程からの転・編入者など多様な生徒が在籍している。また外国にルーツを持つ生徒、不登校を経験している生徒など様々な背景を抱えている生徒も多い」と説明されており、生徒の実態は非常に多様なことが読み取れる。

◆ 香風高校に通う高校生の「社会参加」意識と中学3年生の「社会参加」意識の違い

本プロジェクトを実施するに先立ち、香風高校に通う高校生の「社会参加」意識を明らかにした。具体的には、ICCS(世界的な市民性・市民性教育の調査)が開発している尺度・質問項目(Köhler, 2018)を用いて質問紙調査を行った。また香風高校の社会参加意識の特徴を明らかにするために、得られたデータを、同質問紙を用いて中学3年生に調査した小栗・堀井(2021)のデータと比較した。ここでは、社会参加意識として「SNSを通した社会参加経験」「市民的効力感」「学校づくりへの参加意欲」「投票への参加意欲」「政治的行動への参加意欲」に焦点化して、香風高校の生徒の特徴を取り上げる。

なお、以下2点でデータの妥当性に限界がある点は、課題である。1つ目は、中学3年生のデータは、3県15校の1495名の調査対象者であるのに対して、香風高校のデータは、50名の調査データである。香風高校の特徴を表しているとは必ずしも言い切れない点である。2つ目は、香風高校のデータは、全質問項目に回答した生徒のデータを有効データとしており、回答に対して協力的である生徒のデータである点にある。

表 SNSを通した社会参加経験に関する調査結果の比較

質問項目	中学3年生				香風高校			
	低	やや低	やや高	高	低	やや低	やや高	高
インターネットやSNSで政治的・社会的な情報を得ている	15%	15%	25%	45%	15%	17%	17%	51%
インターネットやSNSで政治的・社会的な問題に関することを発信(=投稿)している	87%	6%	4%	3%	89%	2%	6%	2%
インターネットやSNSで政治的・社会的な問題に関して書き込みやシェア(例:リツイート)をしている	82%	8%	5%	5%	79%	6%	11%	4%

※低欄は、「全くない」と回答した生徒の割合、やや低欄は、「一ヶ月に一回程度」と回答した生徒の割合、やや高欄は、「一週間に一回程度」と回答した生徒の割合、高欄は、「ほぼ毎日」と回答した生徒の割合を示している。

表 市民的効力感に関する調査結果の比較

質問項目	中学3年生				香風高校			
	低	やや低	やや高	高	低	やや低	やや高	高
国際問題について書かれた新聞記事を題材に議論できる	38%	34%	18%	9%	64%	30%	6%	0%
社会問題について自分の考えを言うことができる	23%	30%	28%	19%	55%	28%	17%	0%
学校の学級委員か生徒会役員のどちらかに立候補できる	39%	23%	17%	21%	63%	15%	13%	9%
学校を変えるために、同じ考えの人と団結するためのグループを作ることができる	28%	32%	25%	15%	64%	32%	4%	0%
社会で意見の分かれている問題についてあつかうテレビ番組を理解することができる	13%	28%	35%	24%	38%	32%	17%	13%
現在の問題についての自分の意見を伝えるために、新聞社に手紙やメールを送ることができる	60%	26%	9%	5%	83%	13%	4%	0%
政治・社会問題について自身のクラスの前で話ができる	42%	32%	15%	10%	79%	13%	6%	2%

※低欄は、「自信なし」と回答した生徒の割合、やや低欄は、「あまり自信なし」と回答した生徒の割合、やや高欄は、「やや自信あり」と回答した生徒の割合、高欄は、「自信あり」と回答した生徒の割合を示している。

表 学校づくりへの参加意欲に関する調査結果の比較

質問項目	中学3年生				香風高校			
	低	やや低	やや高	高	低	やや低	やや高	高
学級委員選挙か生徒会選挙のどちらかに投票する	20%	13%	16%	51%	47%	21%	23%	9%
学校をより良くするためのグループに参加する	20%	39%	26%	15%	55%	38%	2%	4%
学校の学級委員か生徒会役員のどちらかに立候補できる	45%	31%	13%	11%	64%	17%	15%	4%
生徒(総)会の話あい積極的にかわる	32%	34%	22%	13%	66%	26%	6%	2%
学校新聞や学校のウェブサイトの記事を書く	62%	29%	4%	4%	74%	23%	2%	0%

※低欄は、「今後しない」と回答した生徒の割合、やや低欄は、「今後する可能性は低い」と回答した生徒の割合、やや高欄は、「今後する可能性は高い」と回答した生徒の割合、高欄は、「今後する」と回答した生徒の割合を示している。

表 投票への参加意欲に関する調査結果の比較

質問項目	中学3年生				香風高校			
	低	やや低	やや高	高	低	やや低	やや高	高
県や市町村の選挙で投票する	15%	16%	31%	39%	23%	21%	34%	21%
国の選挙で投票する	14%	20%	30%	36%	21%	26%	34%	19%
選挙に行く前に立候補者の情報を手に入れる	13%	22%	36%	28%	32%	21%	30%	17%

※低欄は、「今後しない」と回答した生徒の割合、やや低欄は、「今後する可能性は低い」と回答した生徒の割合、やや高欄は、「今後する可能性は高い」と回答した生徒の割合、高欄は、「今後する」と回答した生徒の割合を示している。

表 政治的行動への参加意欲に関する調査結果の比較

質問項目	中学3年生				香風高校			
	低	やや低	やや高	高	低	やや低	やや高	高
選挙期間に立候補した人や政党の手助けをする	42%	46%	9%	4%	60%	34%	4%	2%
政党に入る	85%	13%	2%	1%	85%	15%	0%	0%
労働組合(=給料・働く環境を良くするために作られた団体)に参加する	55%	34%	7%	3%	70%	23%	4%	2%
県や市町村の選挙で立候補する	85%	12%	1%	2%	83%	15%	2%	0%
政治的・社会的な主張をするグループに参加する	72%	24%	3%	2%	83%	17%	0%	0%

※低欄は、「今後しない」と回答した生徒の割合、やや低欄は、「今後する可能性は低い」と回答した生徒の割合、やや高欄は、「今後する可能性は高い」と回答した生徒の割合、高欄は、「今後する」と回答した生徒の割合を示している。

以上が中学3年生と香風高校の生徒の「SNS を通した社会参加経験」「市民的効力感」「学校づくりへの参加意欲」「投票への参加意欲」「政治的行動への参加意欲」の結果である。「SNS を通した社会参加経験」以外は、政治的社会化が発展途上の中学生(太田, 2018)と比較しても、香風高校の生徒の「社会参加」意識は厳しい傾向にあることが読み取れる。

こうした現状から、「社会参加におけるエンパワメント格差」が他の中学校や高校生と比較しても起きているとして、本プロジェクトを香風高校の先生方と共同しながら実施するに至ったのである。

◆ 1章での参考文献

Köhler, H., Weber, S., Brese, F., Schulz, W. and Carstens, R. (2018). *ICCS 2016 User Guide for the International Database*: Amsterdam: International Association for the Evaluation of Educational Achievement (IEA).

Levinson, M. (2012). *No citizen left behind*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

Freedman, E. and Kim, J. (2019). Design Research in Social Studies: Its History, Methodology, and Promise. In a Rubin, B., Freedman, E. and Kim, J. (Eds.), *Design Research in Social Studies Education: Critical Lessons from an Emerging Field* (pp.3-27). New York, NY: Routledge.

大島純(2004)「最近の学習研究の方法論とその成果」『JSiSE 論文誌』21, pp.157-167.

太田昌志(2018)「子どもの投票意欲と内的政治的有効感覚—小学生から高校生の親子データの分析—」『<教育と社会>研究』28, pp.1-12.

小栗優貴・堀井順平(2021)「子どもの社会参加を促進している学校カリキュラムとは何か—ICCS 調査を応用した中学生への質問紙調査から—」『社会科学研究』95, pp.49-60.

三宅なほみ・白水始(2003)「5-デザイン研究」三宅なほみ・白水始『学習科学とテクノロジー』放送大学教材.

石川照子(2019)「高等学校における通級による指導の取組—生徒一人ひとりのところに寄り添う通級指導とは—」全国定時制通信制高等学校長会(2019)『文部科学省平成30年度委託調査研究報告書 定時制・通信制課程における多様なニーズに応じた指導方法等の確立・普及のための調査研究』シアース教育新社.

2. プロジェクトに関わるセミナー・学会・論文発表等の一覧

◆ 【オンラインセミナー発表】2021年3月6日(土)

小栗優貴・石川照子「デジタル時代に政治教育はどう変わるのかー日本での実践からー」日本シティズンシップ教育主催：J-CEF スタディ・スタジオ Online Vol.7 デジタル時代の政治参加と政治教育を考えよう、オンライン。



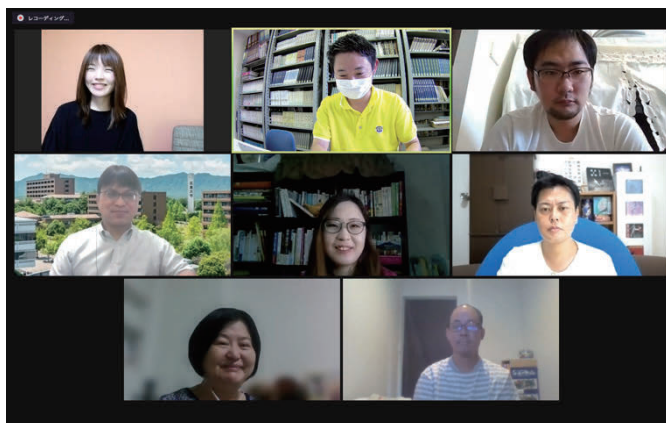
関連 URL:

<https://kyosha.hiroshima-u.ac.jp/archives/770>

【概要】第1期の研究成果について、小栗・石川で発表を行った。約40名ほどの研究者・小中高教員・NPO 法人の方に研究成果を発表できた。

◆ 【広島県の定時制高校の先生向けのオンラインセミナー発表】2021年9月25日(土)

小栗優貴・望月翔平・古塚明日人・北川弘紀・石川照子・草原和博「社会参加を促進する教育課程をいかに作り出すか」広島・兵庫定時制高校主権者教育研究会、オンライン。



【概要】第1期・第2期の研究成果について、同問題を抱える広島県の定時制高等学校で勤務する教諭2名に発表と意見交換を行った。広島県の定時制高校の先生からは、研究成果を取り入れたいという意見と同時に、実施にあたって多様なステイクホルダーとの調整が必要という意味での難しさも指摘された。

◆ 【オンラインセミナー発表】2021年10月10日(日)

北川弘紀・古塚明日人・望月翔平・小栗優貴「社会参加を促進する教育課程をいかに作り出すか」広島大学教育ビジョン研究センター第94回定例オンラインセミナー「主権者教育の改革を考える(7) 日本版「ポイテルスバツハ・コンセンサス」考」

社会参加を促進する教育課程をいかに作り出すか
— ある定時制高校の実践から —



北川弘紀(兵庫県立篠山鳳鳴高等学校)
古塚明日人(兵庫県立西宮香風高等学校)
望月翔平(兵庫県立西宮香風高等学校)
小栗優貴(広島大学大学院)

関連 URL: <https://evri.hiroshima-u.ac.jp/20140>

【概要】第1期・第2期の研究成果について、北川・古塚・望月・小栗で発表を行った。その後、草原のファシリテートのもと、第1期・第2期の研究成果をもとに、日本版ポイテルス・バツハコンセンサス(政治教育の基本原則)を80名の研究者・学校教員・主権者教育の関係者とともに議論した。

◆ 【学会発表・課題研究】2021年11月28日(日)

石川照子「多様な生徒が学ぶ定時制高校における『違い』を活かした市民性教育—『違い』を認めることを超えて—」日本社会科教育学会 課題研究IV「ダイバーシティの視点から、今後求められる社会科授業を考える」

【概要】第2期の研究成果について、ダイバーシティの視点から研究成果を再構成し発表した。研究者・大学院生・社会科教師を中心に約40名と、本プロジェクトを事例にこれからの社会科授業を考察した。

◆ 【論文・査読有】

小栗優貴「社会参加におけるエンパワメント格差の是正を目指した『現代社会』単元開発—デジタル・シティズンシップ単元集 DCRP を応用した定時制高校での実践を事例として—」『社会系教科教育学研究』第33号、印刷中。

【概要】第1期のデザイン研究から明らかになったデザイン原則を学会誌へ投稿した。

◆ 【論文】

小栗優貴・望月翔平・古塚明日人・草原和博・石川照子・北川弘紀・南理恵「社会参加におけるエンパワメント格差の是正を目指したカリキュラム開発・実践—定時制高校での情報科・地理歴史科の連携—」『三重大学教育学部研究紀要』第37巻、印刷中。

【概要】第2期のデザイン研究について三重大学の教育学部研究紀要に投稿・掲載した。

3. 第Ⅰ期デザイン研究の成果

3-1. 第Ⅰ期から明らかとなったデザイン原則

第Ⅰ期は、草原和博・小栗優貴・石川照子・北川弘紀で公民科『現代社会』の単元開発を行った。開発にあたっては、米国のハーバード大学のバークマン・クラインセンターが作成した DIGITAL CITIZENSHIP + RESOURCE PLATFORM (以降、センター略称に沿って DCRP と表記) の単元集を手がかりにデザイン原則を抽出し、5時間の単元を開発・実践・省察した。デジタル・シティズンシップを依拠する概念としたのは、デジタル世界は、応答性が保障された空間であり、誰にも声を制限されることのない社会参加を構想できるからである。すなわち、生徒が感じていた希薄化した社会参加システムを打破することで、参加をエンパワーできると考えたからである。開発・省察の結果、以下のデザイン原則を明らかにできた。

表 第Ⅰ期省察後の格差是正を目指すカリキュラムデザイン原則

単元構成に関する原則	I-a	デジタル社会へエンパワメントする単元構成
	I-b	<u>①不正義状態の構造的理解</u> ②アドボカシー概念獲得 ③アドボカシー実行のスキル獲得 ④学びを踏まえたアドボカシー という学習段階
	I-c	<u>多様な教科が中長期的に連動したカリキュラム</u>
授業構成に関する原則	I-d	自身のアドボカシーを開発・発信する
	I-e	社会(他者)のアドボカシーを調査・分析する
学習環境に関する原則	I-f	応答性を重視した活動や学習環境を作る

※太字下線部は、第Ⅰ期の省察から取り入れたデザイン原則である。

3-2. 第Ⅰ期の授業実践概要

次頁以降、第Ⅰ期の授業実践概要を示すために、小栗優貴・石川照子「デジタル時代に政治教育はどう変わるのかー日本での実践からー」日本シティズンシップ教育フォーラム主催「J-CEF スタディ・スタジオ Online Vol.7 デジタル時代の政治参加と政治教育を考えよう」オンラインの発表資料(一部改変)を掲載する。

デジタル時代に政治教育はどう変わるのか — 日本での実践から —



(絵: 広島大学大学院 久保美奈作)

J-CEF
デジタル時代の
政治参加と
政治教育を考えよう
2021年3月6日(土) 15:30 - 17:30 (Zoom)

◆ スケジュール

- 1) オープニング/参加者自己紹介
コーディネーター: 河野 次美さん、野島 浩平さん
(広島大学大学院 教育学研究科)
- 2) 話題提供1: デジタル時代に政治参加はどう変わるのか — 米国の教材から —
話題提供者: 宮野 誠啓さん、今井 勉介さん、宇ノ木 啓太さん
河野 次美さん、野島 浩平さん、河野 一穂さん
(広島大学大学院 人間社会科学研究科)
- 3) 話題提供2: デジタル時代に政治参加はどう変わるのか — 日本での実践から —
話題提供者: 小栗 優貴さん(広島大学大学院 教育学研究科)
石川 照子さん(兵庫県立西宮香風高等学校)
- 4) 質疑応答/ディスカッション
コーディネーター: 古田 謙一さん(大阪府立大学大学院 准教授)
- 5) クロージング

◆ 申し込み

パブリコやスマートフォン等の普及によって、大人だけでなく、子どももオンライン上で政治参加する機会が増えてきました。最近ではデジタルシチズン教育、例えばTwitter などのソーシャルメディアを通じて政治的意見を表明することなどが、しばしば見られます。こうしたデジタル時代では、選挙権を有していない子どもも積極的に政治参加する機会を得る一方で、その方法ももたらす弊害も存在していると考えられます。このような状況下で、政治参加はデジタル時代の政治参加とどうつながるべきか、どのように実践していくべきか、などについて、本セッションでは、米国の教材や実践、日本における実践事例を踏まえて、デジタル時代の政治参加の現状や課題、日本での実践事例を踏まえて、デジタル時代の政治参加について考えたいと思います。ご参加お待ちしております。

※申し込みは、ご参加の申し込みを希望される方へお送りいたします。お申し込みは、お申し込みの受付期間内に行ってください。お申し込みの受付期間は、お申し込みの受付期間内に行ってください。お申し込みの受付期間は、お申し込みの受付期間内に行ってください。

小栗優貴(広島大学大学院)
石川照子(兵庫県立西宮香風高校校長)

デジタル時代に政治教育はどう変わるのか

話題提供2での米国の教材から政治教育はこう変わる!!

- すでに無意識にやってきた参加を自己反省する学習によって、オンライン上の活動に伴うリスクを回避しつつ、より効果的に政治参加ができるようになる!!

話題提供3・4(本発表)での日本の実践から政治教育はこう変わる!!

- これまで政治のアーリーナに乗ることが難しかった児童・生徒の教室の政治教育が変わる!!
- 政治的効力感へ働きかける教育へと変わる!!

私たちが共同研究をしている理由(問題意識)

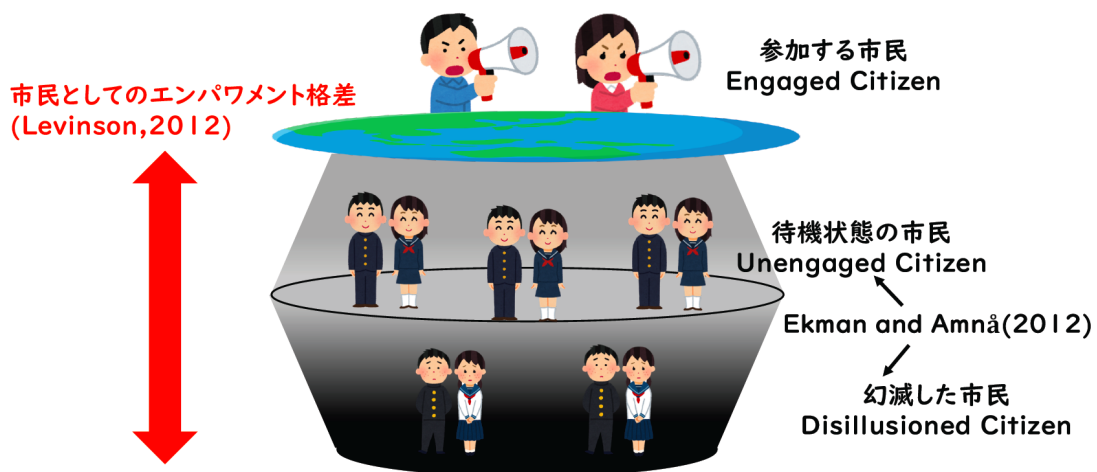
多様な背景を持つ、しばしば政治を学ぶことに意味を見出せない
高校生の政治参加と政治教育を促進する



絵:久保美奈(広島大学大学院作)

3

私たちが共同研究をしている理由(問題意識)



市民としてのエンパワメント格差が問題意識

4

今回実践した兵庫県立西宮香風高等学校の様子

香風高校の仕組み

- 多部制（1部，2部，3部）
- 単位制
（3～6年かけて卒業）
- 多様な生徒
（成人，外国人，障害，慢性疾患・・・）
- 多様な学習歴
（入学試験に転編入枠有）
- 学校規模（約740名）



コモンホール
（学校提供）

5

こうした学校に対して有効になるのが・・・

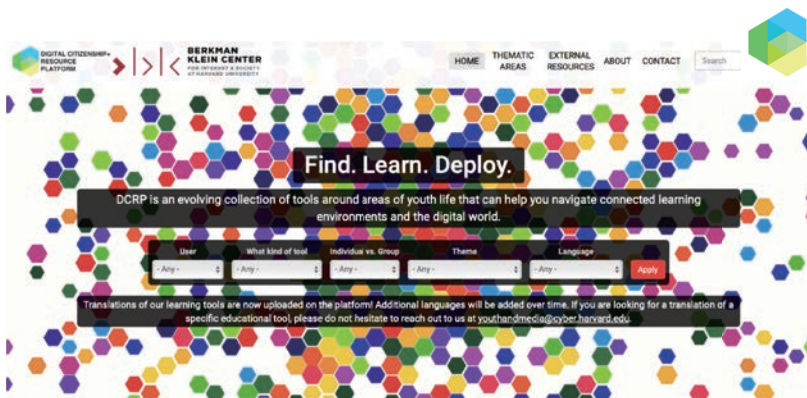
デジタル・シティズンシップ
概念ではないか？！



よくわからない大人が作った方法で参加するのではなく
生徒による生徒の方法で政治へ参加できるから！

6

参考にしたデジタル・シティズンシップ単元集



<https://dcrp.berkman.harvard.edu> HP
のメインページのキャプチャ

ハーバード大学のバークマン・クラインセンターが開発した
カリキュラム・プランDCRP
(Digital Citizenship Resource Platform)
を参考に実践を開発することにした。

7

DCRP「社会・政治参加」単元にある15の授業プラン



社会・政治参加

Civic and Political Engagement



<https://dcrp.berkman.harvard.edu/theme/civic-and-political-engagement> (HPよりキャプチャ)

15の授業プランのうち、
DCRPが軸にする6つの授業案を参考にした

8

表 DCRP「社会・政治参加」単元の中核とされる6つの授業案

次	次名	目標	活動
1	変化を生み出そう	アドボカシー概念を理解する。	・自身のアドボカシーを表現し、どのようにすれば実現するかを考える。
2	運動家のネットワークの力	SNSでアドボカシー活動を促進する方法とオンラインコンテンツの開発方法を理解する。	・SNSの広がり分析をする。 ・自身のアドボカシーを適切だと思うオンラインの方法で表現する。
3	メディアを用い変化を生み出す	様々な種類のメディアを用い問題に意識を向けさせる方法を獲得する。	・各種メディア(FB・インスタ・Youtubeなど)がどのような観点から効果的かを調査する。
4	ハッシュタグで関心を引く	ハッシュタグが社会運動に効果的であったかを知り、意識を高めるための#を開発する。	・BLACK LIVES MATTERのハッシュタグ分析。 ・自身のアドボカシーの#を開発する。
5	ポップカルチャーとアドボカシーの出会い	・ポップカルチャーとアドボカシーの関係性を理解する。 ・自身と関係するポップカルチャーを決める	・ハリーポッターの分析 ・自分のアドボカシーを伝えるために、どんなポップカルチャーを使用して多くの人に伝えるかを考える
6	変化のために行動を起こす!	学んだことをもとに、SNS上でアドボカシーするための 最終計画 をする。	・いくつかの観点をもとに、オンラインで発信する計画を立てる。

<https://dcrp.berkman.harvard.edu/theme/civic-and-political-engagement> より筆者作成

9

DCRP単元「あなたの起こしたい変化を生み出す」の変更

DCRPは発信の計画だけか～
リアルに発信させたいな～

いいですよ…!

「青年期の政治参加は、将来の政治参加の『乗り物(vehicle)』である (Celia, 2008)」



小栗



石川

10

そこでTwitterアカウントを作成



実践で用いたTwitterアカウント

11

表 DCRP 「社会・政治参加」単元の中核6次を用いたアレンジ案
(アレンジは4点目)

次	次名	目標	活動
1	変化を生み出そう	アドボカシー概念を理解する。	・自身のアドボカシーを表現し、どのように実現するかを考える。
2	運動家のネットワークの力	SNSでアドボカシー活動を促進する方法とオンラインコンテンツの開発方法を理解する。	・SNSの広がり分析をする。 ・自身のアドボカシーを適切だと思うオンラインの方法で表現する。
3	メディアを用い変化を生み出す	様々な種類のメディアを用い問題に意識を向けさせる方法を獲得する。	・各種メディア(FB・インスタ・Youtubeなど)がどのような観点から効果的かを調査する。
4	ハッシュタグを用い変化を生み出す	効果的であったハッシュタグを開発する。	・BLACK LIVES MATTERのハッシュタグを参考に開発する。 +4.リプライする
5	ポップカルチャーとアドボカシーの出会い	・ポップカルチャーとアドボカシーの関係性を理解する。 ・自身と関係するポップカルチャーを決める	・ハリーポッターに関わる運動の分析 ・自分のアドボカシーを伝えるために、どんなポップカルチャーを使用して多くの人に伝えるかを考える
6	3.上の1・2を踏まえてツイートできる	1・2の目標を達成する	・1・2の観点をもとに、オンラインの計画を立てる。

12

単元「わがままツイートで社会を変えてみよう」

【単元の目標】

1. アドボカシー概念を獲得する
2. アドボカシーを実行できるスキルを獲得する
3. 上の1・2を踏まえてツイートできる

1～3を通して市民的効力感（社会を変えられる自信）を高める

13

実践した教科・時数・教員

- ・ 兵庫県立西宮香風高等学校「現代社会」教室
- ・ 5時間単元
- ・ 実践者：北川 弘紀 先生
- ・ 理科教員・情報教員の協力のもと



北川 弘紀 先生

14



実施したクラスの様子

15

対象生徒

- 全員(21名)再履修生徒
→昨年度授業出席数やテストの点数が足りず、単位を落とした生徒
- 21人履修しているが現時点で単位が取れそうなのは、
11人(既に10人は出席が足りない)
- 2時間連続授業を火・金に半年受けて、履修単位認定
- 次の時間や次週に生徒が出席してくれるとは限らない。

16

表 実践の流れ

次	次名	目標	活動
1	変化を生み出す (1時間目)	アドボカシー概念を理解する。	・自身のアドボカシーを表現し、どの ように実現するかを考える。
2	運動家のネットワー (3時間目)	オンラインコンテンツの開発方法を理解する。	・自身のアドボカシーを適切だと思う オンラインの方法で表現する。
3	メディアを用い変化を 生み出す	様々な種類のメディアを用い 問題に意識を向けさせる方法を獲得する。	・各種メディア(FB・インスタ・ Youtubeなど)がどのような観点か ら効果的かを調査する。
4	ハッシュタグで関 (2時間目) (4時間目)	2.アドボカシーを実行でき るスキルを獲得する	VESMATTERのハッ ブカシーの#を開発する。
5	ポップカルチャーと (2時間目) (4時間目)	・ポップカルチャーとアドボカシーの関係性を 理解する。 ・自身と関係するポップカルチャーを決める	・ハリーポッターの分析 ・自分のアドボカシーを伝えるために、 どんなポップカルチャーを使用して多 くの(5時間目) 考える
6	3.上の1・2を踏まえてツイートできる		4.リプライする

【1時間目】

アドボカシー概念の獲得 Part I



ここからは、授業中で実際に用いたスライドと
生徒の反応を記載します。

①今、学校生活や日々の生活(例えばアルバイト)のこ
とで、「腹立たしいこと・ムカつく・やめてほしい・変えてほ
しい」ことをたくさん挙げてみよう! わがままでOK!



授業中のある生徒
の記述内容

お小遣い少ない



授業中のある生徒
の記述内容

店長が私の事を下の名前で呼んでくる

② 動画を見て次の3人の発言は「わがまま」か「主張」か4段階で評価し、理由を書こう！

なぜ坊主にしなきゃいけないの？

なぜ坊主にしなきゃいけないの？

なぜマスクしなきゃいけないの？

柔道物語
八木くんの
アニメーション

新潟県野球部の
Xさんの
ニュース映像シーン

マスパセさんの
ニュース
映像シーン

動画1:八木くん

動画2:Xさん

動画3:マスパセさん

わがままだ！

主張だ！

1-----2-----3-----4 21

③ 「同じ坊主が嫌！」なのに、なぜ「八木くん」はわがまま、Xさんは主張と社会の人はいうのだろうか？

なぜ坊主にしなきゃいけないの？

わがまま！

主張

なぜ坊主にしなきゃいけないの？

柔道物語
八木くんの
アニメーション

新潟県野球部の
Xさんの
ニュース映像シーン

部員が減ったから

1985年 動画1:八木くん

新潟県野球部員の
減少を
示すグラフ

2019年 動画2:Xさん

22

【2時間目】

アドボカシーを実行できるスキルを獲得する
ツイートする
Part I



④ #KuToo運動・# MeToo運動はどのように広がったのだろうか。動画4をみて答えよう。



授業中のある生徒
の記述内容

SNSを通してリツイートなどのかくさん
するツールによって広がった



授業中のある生徒
の記述内容

1人が何かしらの意見を述べて共感する
者が増えて広がる

パフォーマンス課題

Twitterで自分の「(腹立たしい・ムカつく・やめてほしい・変えてほしい)
わがまま」をつぶやく計画を立てよう！

25

⑤自分がツイートする「わがまま」を①の中から決定しよう！すでにそうした「わがまま」をしている人が作った#があるか調べよう。

自分が取り上げる主張	
主張に関わる #	関連する画像・動画・ユーザー

授業で用いたワークシートの一部

26

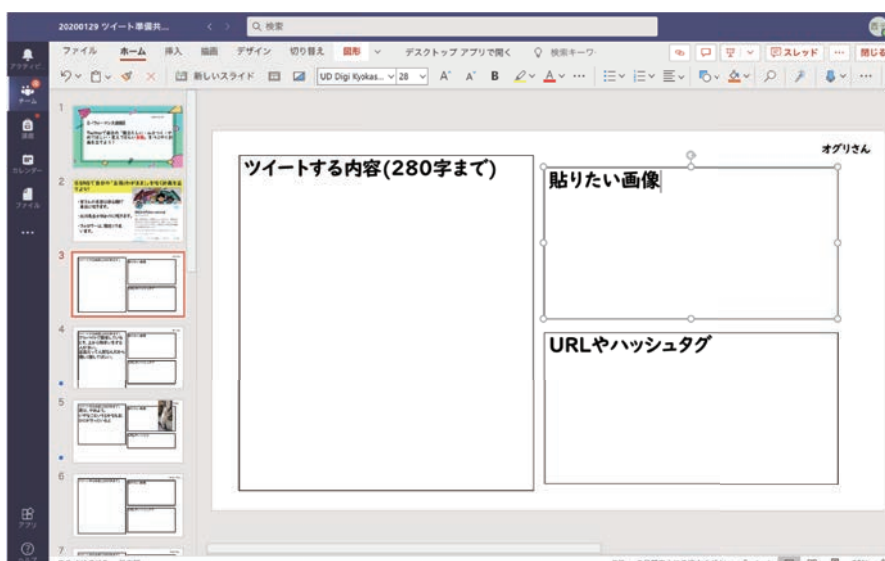
⑤ SNSで自分の「主張(わがまま)」を呟く計画を立てよう!

- 皆さんの名前は非公開で本当に呟きます。
- 北川が代わりに呟きます。
- フォロワーは、現在27名います。



27

⑤ Teamsのファイルを編集しよう!



ツイート準備をTeams上で行った

28

【3時間目】

アドボカシー概念の獲得 Part2



① 動画を参考に枠内の数字に丸をつけよう。また棒線部に_____言葉を入れてみよう。

1.わがままで!-----2.わがままに近い!-----3.主張に近い!-----4.主張だ!

人物	黒人は吹き出しのセリフを	白人は吹き出しのセリフを	動画に出てきた当時の社会の制度や価値観	今の私は吹き出しのセリフを
2020年頃:BLM運動				
BLM運動の様子	1--2--3--4 と 思 っ て 言 っ て い る	1--2--3--4 と 思 っ て 聞 い て い る	[A.2020年頃の制度・価値観] ・黒人は、白人と同等に扱われる制度 ・黒人の命は大切だという価値観	1--2--3--4 と 思 う
警察を解体しろ!				
1950年代:公民権運動				
ローザパークス バスボイコットの様子	1--2--3--4 と 思 っ て 言 っ て い る	1--2--3--4 と 思 っ て 聞 い て い る	[B.1950年代の制度・価値観] ・黒人は、白人にバスの座席を_____制度 ・黒人より白人の方が偉いという価値観	1--2--3--4 と 思 う
私は、席をゆずらないわ!				
1660年代:奴隷時代				
奴隷貿易の様子	1--2--3--4 と 思 っ て 言 っ て い る	1--2--3--4 と 思 っ て 聞 い て い る	[C.1660年代の制度・価値観]	1--2--3--4 と 思 う
働きたくない!				

授業で用いたワークシートの一部

② 「白人」や「あなた」の評価する時の基準は、どこから出来上がっているんだろう。表の中のアルファベットから選んで丸をつけよう。

	当時の白人の 1--2--3--4 評価	今の私の 1--2--3--4 評価
2020 年頃 BLM 運動	A ・ B ・ C から出来上がっている	A ・ B ・ C から出来上がっている
1950 年代 公民権運動	A ・ B ・ C から出来上がっている	A ・ B ・ C から出来上がっている
1660 年代 奴隷時代	A ・ B ・ C から出来上がっている	A ・ B ・ C から出来上がっている

授業で用いたワークシートの一部

31

当時の白人は・・・

1.わがままで!-----2.わがままに近い! -----3.主張に近い! -----4.主張だ!

人物	黒人は吹き出しのセリフを	白人は吹き出しのセリフを	動画に出てきた当時の社会の制度や価値観	今の私は吹き出しのセリフを
2020 年頃: BLM 運動 BLM運動の様子 警察を解体しろ!	1--2--3--4 と 思っ て 言っ て い る	1--2--3--4 と 思っ て 聞 い て い る	【A.2020 年頃の制度・価値観】 ・黒人は、白人と同等に扱われる制度 ・黒人の命は大切だという価値観	1--2--3--4 と 思 う
1950 年代: 公民権運動 ローザパークスバスボイコットの様子 私は、席をゆずらないわ!	1--2--3--4 と 思っ て 言っ て い る	1--2--3--4 と 思っ て 聞 い て い る	【B.1950 年代の制度・価値観】 ・黒人は、白人にバスの座を _____ 制度 ・黒人より白人の方が偉いという価値観	1--2--3--4 と 思 う
1660 年代: 奴隷時代 奴隷貿易の様子 働きたくない!	1--2--3--4 と 思っ て 言っ て い る	1--2--3--4 と 思っ て 聞 い て い る	【C.1660 年代の制度・価値観】	1--2--3--4 と 思 う

32

今のあなたは・・・

人物	黒人は吹き出しのセリフを	白人は吹き出しのセリフを	動画に出てきた当時の社会の制度や価値観	今の私は吹き出しのセリフを
<p>2020年頃:BLM運動</p> <p>BLM運動の様子</p> <p>警察を解体しろ!</p>	1--2--3--4 と 思っ て 言っ て い る	1--2--3--4 と 思っ て 聞 い て い る	<p>【A.2020年頃の制度・価値観】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒人は、白人と同等に扱われる制度 ・黒人の命は大切だという価値観 	1--2--3--4 と 思 う
<p>1950年代:公民権運動</p> <p>ローザパークス バスボイコットの様子</p> <p>私は、席をゆずらないわ!</p>	1--2--3--4 と 思っ て 言っ て い る	1--2--3--4 と 思っ て 聞 い て い る	<p>【B.1950年代の制度・価値観】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒人は、白人に比べての座席を_____程度 ・黒人より白人の方が偉いという価値観 	1--2--3--4 と 思 う
<p>1660年代:奴隷時代</p> <p>奴隷貿易の様子</p> <p>働きたくない!</p>	1--2--3--4 と 思っ て 言っ て い る	1--2--3--4 と 思っ て 聞 い て い る	<p>【C.1660年代の制度・価値観】</p>	1--2--3--4 と 思 う

33

③動画で見た黒人の発言や行動に対して周りの人が「主張」や「わがまま」だと判断する根拠は何か。



授業中のある生徒
の記述内容

当時の法律や制度の黒人の扱われ方によって、「わがまま」か「主張」か変化する



授業中のある生徒
の記述内容

その当時の価値観や約束によって決まる

34

「わがまま」か「主張」かに手をあげよう。

ローザパークス
バスボイコットの様子

マスパセさんの
ニュース映像シーン

バス
の写真

飛行機
の写真

バス遅らせる**迷惑**

飛行機遅らせる**迷惑**

→黒人の権利獲得へ

→マスクができない人の権利獲得へ

「**主張**」

「**わがまま**」

35

1950年の公民権運動の際には、2020年の新しい制度や価値観から見たから、「主張」になる

1.わがままだ!-----2.わがままに近い! -----3.主張に近い! -----4.主張だ!

人物	黒人は吹き出しのセリフを	白人は吹き出しのセリフを	動画に出てきた当時の社会の制度や価値観	今の私は吹き出しのセリフを
2020年頃:BLM運動 BLM運動の様子 警察を解体しろ!	1--2--3--4 と思って 言っている	1--2--3--4 と思って 聞いている	【A.2020年頃の制度・価値観】 ・黒人は、白人と同等に扱われる制度 ・黒人の命は大切なという価値観	1--2--3--4 と思う
1950年代:公民権運動 ローザパークスバスボイコットの様子 私は、席をゆずらないわ!	1--2--3--4 と思って 言っている	1--2--3--4 と思って 聞いている	【B.1950年代の制度・価値観】 ・黒人は、白人にバスの座席を_____制度 ・黒人より白人の方が偉いという価値観	1--2--3--4 と思う

みんなの回答

バス遅らせる**迷惑**

36

マスクをできない人のみんなの評価が低いのは・・・現在の制度・価値観から見ているから

	マスクをできない人は吹き出しのセリフを	その時の社会の制度や価値観	あなたは吹き出しのセリフを
1.わがままで!-----2.わがまみに近い!-----3.主張に近い!-----4.主張だ!			
現在 マスクをできない人のみんなの評価が低いのは・・・現在の制度・価値観から見ているから なぜマスクを?	1--2--3--4 と思っている 言っている	コロナ禍でマスクをするのは当たり前!	1--2--3--4 思っている 聞いている

飛行機遅らせる迷惑

37

将来の新しい制度や価値から見たら・・・「主張」になる!?

	マスクをできない人は吹き出しのセリフを	その時の社会の制度や価値観	あなたは吹き出しのセリフを
1.わがままで!-----2.わがまみに近い!-----3.主張に近い!-----4.主張だ!			
将来 マスクをできない人のみんなの評価が低いのは・・・現在の制度・価値観から見ているから なぜマスクを?	1--2--3--4 思っている 言っている		1--2--3--4 思っている

飛行機遅らせる迷惑

38

④「公民権運動」のように、社会をよりよくするためには、何が必要か。キーワードを使って説明しよう。

キーワード:「多くの人」「わがまま」「社会の制度や価値観」



多くの人があがまをすれば多くの人にとって、わがまは、社会の制度や価値観と同義になる。わがまが少数になる。



多くの人があ社会の制度や価値感から判断し「わがま」と言えることが大切だと思う

39

【4時間目】

アドボカシーを実行できるスキルを獲得する
ツイートする

Part 2



⑤ BLMでは、どんな投稿があるんだろう。次の # を検索し、ワークシートの問いに答えよう。



【問い1】 BLM 関連の投稿には、他にどんな # がついているか。関係なさそうな # もメモしておこう。

おはよう戦隊2021 #mikoの..

【問い2】 投稿には、どんな色やキャラクターが使われているだろうか。有名なシンボルマークがあるだろうか。

黒塗りの画像

【調べる際に入力すると良いハッシュタグ】

#blacklivesmatter #blackouttuesday #justiceforgeorgefloyd

41

渡辺直美の
黒人差別へ抗議するための
黒塗り画像の投稿
(Instagram)

黒塗りの画像
BLMのシンボル

アーティストによる
曲と黒人差別を
関連させた投稿
(Instagram)

#artist など
色んなハッシュタグをつける
ことで多くの人が見る。

42

パフォーマンス課題

Twitterで自分の「(腹立たしい・ムカつく・やめてほしい・変えてほしい) **社会の制度や価値観に訴えるわがまま**」をつぶやこう!⑤でやったバズりポイントを参考に!

43

【3日目(5時間目)】

リプライする



【振り返り】あなたは、より多くの人に見てもらい、社会の制度・価値感を変えるために、最初のツイートを変えるとしたらどこを変えるか。なぜか。

• 変える箇所を箇条書きしよう。

• 変える理由を箇条書きしよう。

実際のツイート | 【男のメンヘラツイート】

【高校生】



高校生の声(Our voice) @Ourvoice2021

最近友達が彼女と別れてメンヘラ化してきて絡みがウザイ

#男のメンヘラ需要無い #エンタメ #破局 #めんどくさい

9:10 · 2021/02/03 · Twitter Web App

ツイートアクティビティを表示

4件のいいね

【リプ】

私も塾で中学生と話しているとき、「あの子はメンヘラやから」と言うのをよく聞きます。でも、この「メンヘラ」とはどういう意味でつかわれてるのでしょうか？この言葉の使い方には気になるところがあります。

友達も「絡んでくる」ということは、何かしらの形であなたを必要としているのかもしれませんが。友達がなぜ絡んでくるのか、ちょっとだけ友達に寄り添って考えてみると、友達の行動が違って見えてくるかもしれません。

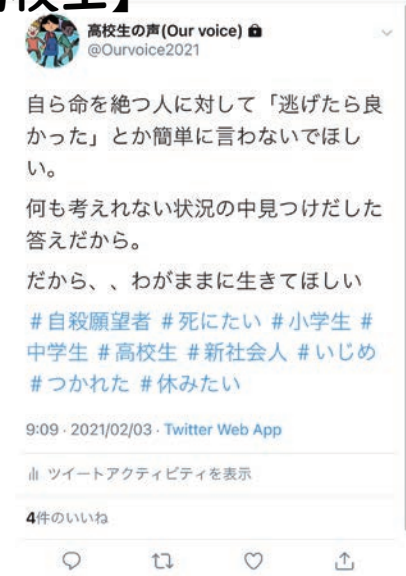
もしかしたら「男らしさ」として、彼女と別れてもサバサバしてるのが男らしいという規範があるのかもしれないね。逆に「女らしさ」として、別れたら愚痴をいうことが女らしいという規範があるのかもしれないね。私たちはどうして「らしさ」にとらわれてしまうんですかね。

【リプに対する返信】

休み

実際のツイート2【自殺者ツイート】

【高校生】

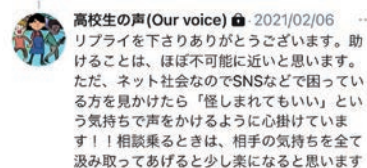


【リプ】

返信先: @Ourvoice2021さん

「逃げたら良かった」って確かに無責任な言い方ですね。でも僕は命を絶つ人を防ぎたいです。なんて言ったり行動したりするのがいいんでしょう。。。難しいです。

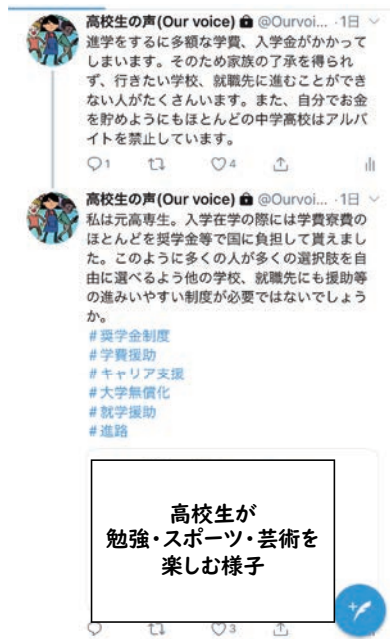
【リプに対する返信】



47

実際のツイート3【奨学金ツイート】

【高校生】



【リプ】

さまざまな選択肢に開かれた環境が与えられることは非常に重要だと思います！

カネだけでなく、ヒト・モノ・情報という資源も僕は重要だと思います！

例えば地方と都市の情報間格差がなくなれば、より自由なキャリア選択ができるのではないのでしょうか！

【リプに対する返信】

とても参考になるご意見をありがとうございます！確かに進路の紹介、資料等があればより多くの選択肢を得られますね。

例えば、全国全ての学校や図書館に資料の手配をしたり、電話やSNS上で進路専門相談窓口が広まると大きな力になれないでしょうか？😊

48

目標への到達点 (テストでの問題と質問紙をもとに)

【単元の目標】

1. アドボカシー概念を獲得する 6/8人
2. アドボカシーを実行できるスキルを獲得する 7/8人
3. 上の1・2を踏まえてツイートできる 3/10人

49

目標への到達点 (テストでの問題と質問紙をもとに)

【市民的効力感の変化】

・国際問題について書かれた新聞記事を題材に議論できる
・社会問題について自分の考えを言うことができる
・学校の学級委員か生徒会役員のどちらかに立候補できる
・学校を変えるために、同じ考えの人と団結するためのグループを作ることができる
・政治・社会問題について自身のクラスの前で話ができる
4件法7問28点(点数が高いほど市民的効力感が高い)

単元前後の市民的効力感の変化

生徒	プ→ポ	生徒	プ→ポ	生徒	プ→ポ
A	9→10	D	7→?	G	7→7
B	7→?	E	10→15	H	9→10
C	?→?	F	7→11		

(プ：プレ調査，ポ：ポスト調査，?：欠席等により調査データ無しを意味する．VI章で論じる全生徒を表記したが取得データとして有効なのは太枠5名である.)

中学3年生の市民的効力感(筆者調査：N=1495)のM=15.11、S.D.5.30であった。エンパワメント格差是正には至らなかった。

デジタル時代の政治教育の可能性と困難性

小栗(授業デザイン者)から見たデジタルシティズンシップ実践の可能性

1. 背伸びをさせない政治教育が理念上可能になった!!!

→デモ・署名活動・陳情・地域での町おこし等の参加に対して「よくわからんし、参加したくもない」という高校生がいた!その生徒たちの参加のハードルを低くしてくれる!

2. 容易にリアル(?)な社会と対話ができるようになった

→学校外との社会との連携はそもそも大変。時間もお金もかかる。ツイッターさえあれば、誰かと対話でき、他者やコミュニティに影響を与えた!と実感しやすくなる。

小栗(授業デザイナー)から見たデジタルシティズンシップ実践の困難性

1. 結局背伸びしてる説

→ 学びの意味が感じられない生徒に有効と言いながらも、そうした生徒は社会に対して表現したいこと(問題関心)があまりなく、いきなり表現しろは、重荷。結局背伸びしてる。

2. 結局リアルじゃない模擬Twitter説

→ 結局は、生徒による生徒の方法で発信していない

3. youtubeやツイッターにそもそもアクセスできない学校のデバイス

53

石川(校長)から見たデジタルシティズンシップ実践の可能性

1. 「投票」以外の政治参加の手段を授業で体験できた!

→ 学校現場では、まだまだ「主権者教育=投票教育」。
生徒にとって身近なSNSが、政治参加に使えることに気づけた

2. 自分が感じる「これおかしくない?」「なんかむかつく」の理由や背景を考えようとすることは、社会的な課題への関心の入り口になり得る

→ 素朴な感情や直感が、SNSでの交流によって個人的なものではなく、社会の文脈の中で位置づけられた

石川(校長)から見たデジタルシティズンシップ実践の困難性

1. 単元レベルではすべての目標の達成は困難

→ 数時間の学習ではなく、年間、あるいは「初等→中等教育」というレベルでのカリキュラムが必要では？

2. 学校での実践には教師の管理が必要

→ いきなり社会に開くことは、学校の危機管理の観点からは困難。しかし、授業での経験は、学校の外での生徒の行動に影響を与えないはず。

3. 学校のICT環境整備

→ 通信速度や機器の課題は少しずつ解決されるであろう。

話題提供3・4まとめ

話題提供3・4(本発表)での日本の実践から政治教育はこう変わる!!

- ・これまで政治のアリーナに乗ることが難しかった児童・生徒の教室の政治教育が変わる!!
- ・実際に発信する学習を構成できるように変わっていく!!

参照文献・サイト

- ・<https://dcrp.berkman.harvard.edu> (最終閲覧:2021年3月2日)
- ・Levinson, M.(2012). *No citizen left behind*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- ・Ekman, J. and Amnå , E. (2012). *Political participation and civic engagement : Towards a new typology*. *Human Affairs*, 22 , pp.283-300.
- ・ Sheerin, C.(2008). *Political Efficacy and Youth Non-Voting A Qualitative Investigation into the Attitudes and Experiences of Young Voters and Non-voters in New Zealand*, VDM Verlag.

※本研究は、「公益財団法人 日本生命財団 2020年度児童・少年の健全育成実践的研究『定時制高校における主権者教育の構造改革のためのデザイン研究』の助成を受けたものである

4. 第2期デザイン研究の成果

4-1. 第2期から明らかとなったデザイン原則

第2期は、草原和博・小栗優貴・石川照子・望月翔平・古塚明日人で情報科『情報の表現と管理』『社会と情報』、地理歴史科『世界史A』を連携させながら単元開発・実践・省察を行った。第2期の開発・省察の結果、以下のデザイン原則を明らかにできた。

表 第2期省察後の格差是正を目指すカリキュラムデザイン原則

単元構成に関する原則	2-a	デジタル世界を含めた不正義状態を解消する参加システムへエンパワーする
	2-b	<u>①アドボカシーの実行・計画</u> ②不正義状態の構造的理解 ③アドボカシー概念獲得
		④アドボカシー実行のためのスキル獲得 ⑤障壁となっている見方の転換 ⑥学びを踏まえたアドボカシーの再実行 という学習段階
2-c	多様な教科だけではなく、 <u>学校全体で取り組むこと</u>	
授業構成に関する原則	2-d	<u>【中心】</u> 自身のアドボカシーを開発し、多様な方法（音楽・芸術・スポーツ等）で発信
	2-e	<u>【周辺】</u> 過去や現在の人々（過去や現在のロールモデルになりうる他者）のアドボカシーを調査・分析
学習環境に関する原則	2-f	応答性を重視した活動や学習環境を作る
	2-g	議論に開かれた学級風土のもと実施する
	2-h	良好な生徒-生徒間関係を築き、集合的行動へ向かうことで社会参加のロールモデルを見つけやすい空間を作る
	2-i	<u>上の①や⑤の段階には、生徒には、社会システムの変革に関する取組をさせ、成功し参加に意味を見出す経験と失敗し挫折する経験両者を保障しなければならない</u>

※太字下線部は、第2期の省察から取り入れたデザイン原則である。

4-2. 第2期の授業実践概要

次頁以降、第2期の授業実践概要を示すために、北川弘紀・望月翔平・古塚明日人・小栗優貴「社会参加を促進する教育課程をいかにしてつくり出すかーある定時制高校の実践からー」広島大学教育ビジョン研究センター第94回定例オンラインセミナー「主権者教育の改革を考える(7) 日本版「ボイテルス・バツハ・コンセンサス」考」オンラインの発表資料(一部改変)を掲載する。

社会参加を促進する教育課程をいかに作り出すか — ある定時制高校の実践から —



北川弘紀(兵庫県立篠山鳳鳴高等学校)
古塚明日人(兵庫県立西宮香風高等学校)
望月翔平(兵庫県立西宮香風高等学校)
小栗優貴(広島大学大学院)

発表目的

担当:小栗

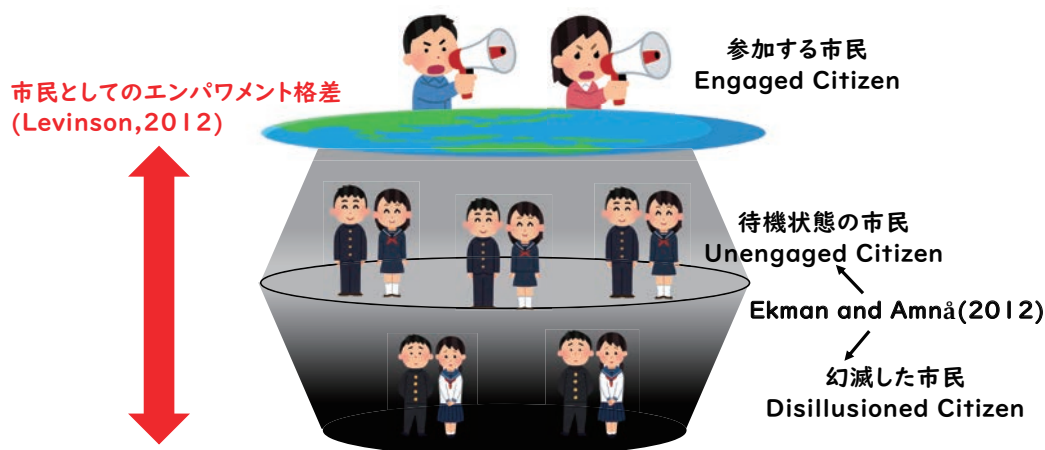
ボイテルスバツハ・コンセンサスの特に3つ目に注目。

- (1) 圧倒の禁止
 - (2) 論争のある問題は論争のあるものとして扱う
 - (3) **個々の生徒の利害関心の重視**
- (3)・・・生徒が自らの関心・利害に基づいて効果的に
政治に参加できるよう必要な能力の獲得が促され
なければならない。

→(3)に関する実践を通して日本版ボイテルス・バツハコンセンサスの提案

背景

多様な背景（社会経済的背景）を持つ生徒は「社会を変えることなんてできない」「私にはそんな力がない」という傾向にある（Levinson, 2012）。社会参加に関わるエンパワメント格差を是正する必要がある。



3

背景

社会参加に関わるエンパワメント格差を是正がなされたかの基準

次の3つの項目値が日本の中学3年生の平均値と同じ、もしくはは超えているか

○ 学校づくりへの参加意欲
中学生平均 10.98

【質問項目】学級委員選挙か生徒会選挙のどちらかに投票する/学校をより良くするためのグループに参加する/学級委員選挙・生徒会選挙のどちらかに立候補する/生徒(総)会の話しあいに積極的にかかわる/学校新聞や学校のウェブサイトの記事を書く
(4件法×5問) 20点が学校づくりへの参加意欲高い

○ 政治的行動への参加意欲
中学生平均 7.00

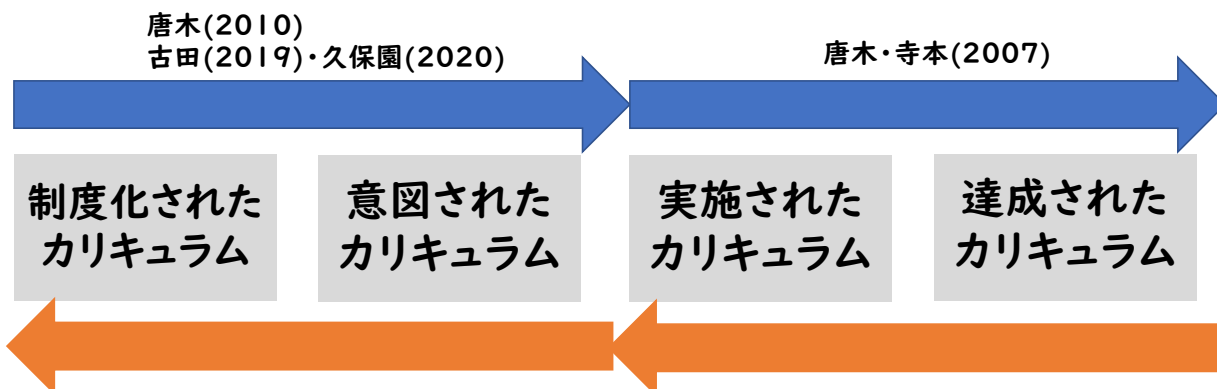
【質問項目】選挙期間に立候補した人や政党(=政治について同じ考えをもつ人々がつくる団体)の手助けをする/政党に入る/労働組合(=給料・働く環境を良くするために作られた団体)に参加する/県や市町村の選挙で立候補する/政治的・社会的な主張をするグループに参加する
(4件法×5問) 20点が政治的行動への参加意欲が高い

○ SNSへの社会参加経験
中学生平均 5.24

【質問項目】インターネットや SNS で政治的・社会的な情報を得ている/インターネットや SNS で政治的・社会的な問題に関することを発信(=投稿)している/インターネットや SNS で政治的・社会的な問題に対して書き込みやシェア(例:リツイート)をしている
(3件法×3問) 9点が政治的行動への参加意欲が高い

4

本研究の前提



ブルーの視点：参加民主主義の視点から見て意味のある教育
 オレンジの視点：子どもから見て社会参加が促進されやすい教育
 ブルーとオレンジ両者を保障する教育課程を構想・実施した

実際 - 実践舞台となる高校 -

- ・三部制・単位制の定時制高校
- ・単位制（3年～6年かけて卒業）
- ・多様な生徒（外国籍・障害・性的マイノリティ）
- ・多様な学習歴（入学試験に転編入卒有）
- ・学校規模（740名）



兵庫県立西宮香風高等学校
 （三部制の定時制高校）

研究の全体像

第1期 2020年10月
～2021年3月

公民科



北川弘紀先生

第2期

2021年4月
～2021年10月

担当：小栗

情報科



望月翔平先生

地歴科



古塚明日人先生

横断
単元



研究目的：**エンパワメント格差を是正するためのデザイン原則（鉄則）を解明する。**
そのために1回の開発・実践・検証を通して原則を明らかにするのではなく
2回（2期）繰り返すことで原則の精度を高める。

7

担当：小栗

3名の先生に発表していただくこと

1. 特設単元前の教育目標・教育課程はどのようなものだったか？
2. 社会参加を促す特設単元の概要はどのようなものだったか？
3. 生徒の社会参加はどのようなものだったか？
4. エンパワメント格差は是正されたのか？

→ボイテルスバツァ・コンセンサスに示唆を与える社会参加を目標にした教育課程の原則をまとめる

8

第1期

9

授業の実際 - 第1期「現代社会」-

担当: 北川



北川弘紀

【特設単元前の現代社会の目標】

社会問題に対して自身の意見を構築できる。

【特設単元前までどんな教育課程を実施したか】

教科書の内容をベースにしつつ、毎小単元の最後には、自身の意見を構築させる。
(例) 憲法9条は改正すべきか？

.0

授業の実際 - 第1期特設単元「現代社会」-

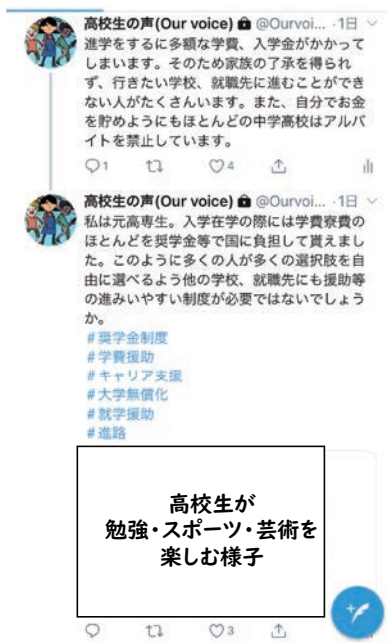
第1次～第4次 社会参加しない予定である→社会参加していこうと思う

次	次の目標	生徒の内容・活動
第1次	アドボカシー概念の獲得	公民権運動のアドボカシーが受け入れられていく変化のフローチャートを作成する
第2次	SNSでの発信スキルの獲得	話題を呼んだSNS投稿のハッシュタグと投稿内容の特徴を列挙する
第3次	アドボカシー概念と発信スキルを踏まえてツイートできる	生徒自身が問題に思っていることを鍵付きツイッターで発信する
第4次	参加することの効力感を得る	自身のツイートのリプライにリプライする

11

実際のツイート

【高校生】



【リプ】

さまざまな選択肢に開かれた環境が与えられることは非常に重要だと思います！

カネだけでなく、ヒト・モノ・情報という資源も僕は重要だと思います！

例えば地方と都市の情報間格差がなくなれば、より自由なキャリア選択ができるのではないのでしょうか！

【リプに対する返信】

とても参考になるご意見をありがとうございます！確かに進路の紹介、資料等があればより多くの選択肢を得られますね。

例えば、全国全ての学校や図書館に資料の手配をしたり、電話やSNS上で進路専門相談窓口が広まると大きな力になれないでしょうか？🙏

12

第1期の研究が日本版ボイテルスバツハ・コンセンサスに示唆すること

- ・デジタル空間も射程にして日本版をデザインする必要性
- ・子どもを市民 (Children as citizen)として扱い日本版をデザインする必要性
- ・教室空間では、どの程度までリアルな社会を追求するかを意識して日本版をデザインする必要性

リアル有：社会参加の概念の獲得・暴言や炎上あり応答性なし参加促進なし



リアル無：暴言や炎上なし応答性あり参加促進あり・社会参加への誤概念の獲得

13

第2期

14

最大目標：エンパワメント格差の是正

世界史A
(古塚先生)

「嫌悪感」の解消
社会参加は変・嫌だ
↓
社会参加は重要だ

社会と情報
(望月先生)

「政治的効力感」の欠如
参加しても意味がない
↓
参加すること
意味がある

情報の表現と管理
(望月先生)

「市民的効力感」の欠如
私には社会参加できない
↓
私には社会参加できる

授業の実際 - 第2期「社会と情報」 -



望月翔平先生

【特設単元前の「社会と情報」の目標】

- ・情報技術を活用する能力の修得
- ・情報発信の影響について考える

【特設単元前までどんな教育課程を実施したか】

- ・コンピュータの特性の理解と活用
- ・情報発信とインターネット上の情報の特性の理解と活用
- ・ネットワークの仕組みと2進数

授業の実際 - 第2期特設単元「社会と情報」-

第1次～第5次 参加しても意味がない→参加することに意味がある

次	次の目標	生徒の内容・活動
第1次	正義の視点を獲得する	不正義の5つの視点に基づき、蟹工船内の不正義を列挙する
第2次	参加の意味が歴史的に変わることが理解できる	蟹工船の作者・労働者の参加の意味を資料から評価する
第3次	SNSを通じた社会参加の可能性の発見	SNS世界の社会運動を蟹工船の社会運動の違い列挙する
第4次	正義の視点を踏まえてSNS投稿にリプライできる	5つの社会派投稿の中から1つを選んでリプを作成する
第5次	参加することの意味を認知できる	リプのリプに対してのリプをグループで作成する

17

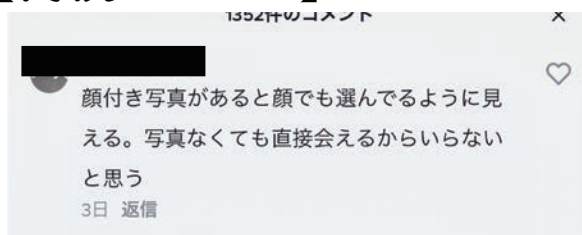
第1期「社会と情報」生徒の社会参加

担当：望月

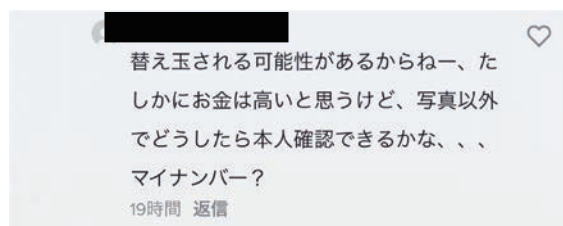
【投稿】

履歴書の
写真欄が必要か
疑義を唱えた動画
(Tiktok)

【高校生のリプ】



【リプに対する返信】



18

単元前後の変容

担当：望月

「社会と情報」を受講した単元前後の生徒の変容

生徒		生徒	プ→ポ	生徒	プ→ポ
中学生の平均	10.98	A	11→8	B	9→5
	7.00		7→5		5→5
	5.24		3→6		3→6
C	10→7	D	5→5	E	10→7
	10→5		5→5		5→6
	5→4		3→5		3→3

(プ：プレ調査, ポ：ポスト調査, 筆者ら作成)

上段「学校づくりへの参加意欲」・中段「政治的行動への参加意欲」・下段「SNSへの社会参加経験」の質問項目への肯定的な回答ポイントを示す。各項目については、スライド4参照。

社会参加におけるエンパワメント格差には至らなかった

授業の実際 - 第2期「情報の表現と管理」-

担当：望月



望月翔平先生

【特設単元前の情報の表現と管理の目標】

- ・情報を処理する力を身に着ける
- ・情報の表現に関する知識や技術を身につける

【特設単元前までどんな教育課程を実施したか】

- ・ピクトグラムを使った情報表現
- ・専門用語を言い換えた表現
- ・画像処理ソフトの活用

20

授業の実際 - 第2期「情報の表現と管理」-

担当:望月

第1次～第5次 私には社会参加できない→私には社会参加できる

次	次の目標	生徒の内容・活動
第1次	正義の視点を獲得する	不正義の5つの視点に基づき、蟹工船内の不正義を列挙する
第2次	参加の意味を歴史的に評価できる	蟹工船の作者・労働者の参加の意味を資料から4件法で評価する
第3次	SNSを通じた参加スキルの獲得	話題を呼んだSNS投稿のハッシュタグと投稿内容を列挙する
第4次	正義の視点を踏まえてポスターを作成できる	GIMPを使用して自身の問題に思っているポスターを作成する
第5次	効果的な発信方法で発信できる	どのような方法で何に留意して発信するかを決定する

21



担当:望月

22

単元前後の変容

担当：望月

「情報の表現と管理」を受講した単元前後の生徒の変容

生徒		生徒	プ→ポ	生徒	プ→ポ
中学	10.98		9→7		11→14
生の	7.00	F	9→6	G	5→5
平均	5.24		6→6		6→5

上段「学校づくりへの参加意欲」・中段「政治的行動への参加意欲」・下段「SNSへの社会参加経験」の質問項目への肯定的な回答ポイントを示す。各項目については、スライド4参照。

社会参加におけるエンパワメント格差には至らなかった

第2期「情報の表現と管理」 生徒の社会参加

担当：望月

SNSいじめ
について
ユーザーに
問い直すことを
ねらった
ポスター作品
(生徒F作)

学校の
治安について
高校生全員に
問い直すことを
ねらった
ポスター作品
(生徒G作)

授業の実際 - 第2期「世界史A」-



古塚明日人先生

【特設単元前の世界史Aの目標】

- 現代文明がひと繋がりであり、もはやそこに「別の人」はいないということを理解する。
- 積極的な意志のもと、社会に自ら関わる姿勢を育てる。
- 社会のあり方に対して批判的な態度で向き合う力を身につける。
- 人権に配慮し、互いのアイデンティティや文化を尊重し、共生する力を身につける。
- 社会における「自由」に向き合う。

【特設単元前までどんな教育課程を実施したか】

- 近代国家と国民の形成の過程を知る。
- フォンターナ『鏡の中ヨーロッパ』の視点から、ヨーロッパ世界の形成を概観する。
- インドの盗賊ヴィーラッパンの存在から、南アジアの現状とヨーロッパの関わりを見る。
- 欧米の市民による革命とシャルリ・エブド襲撃事件を比較し、自由とアイデンティティについて考える。

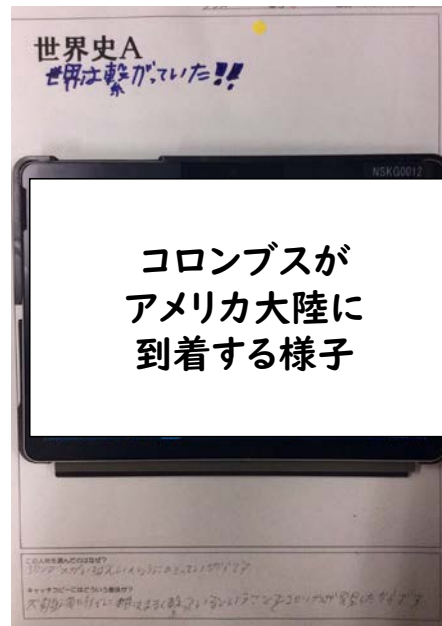
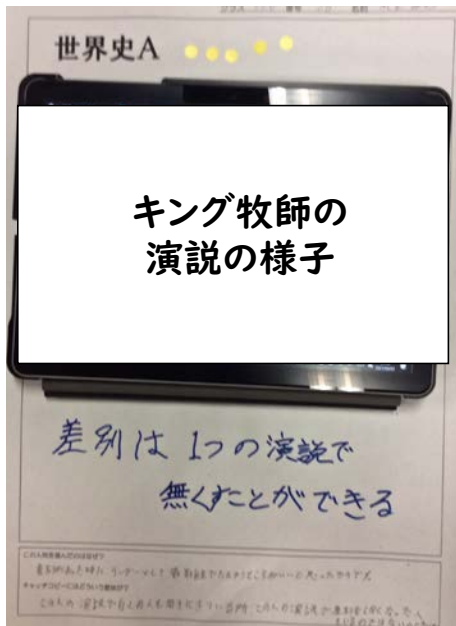
授業の実際 - 第2期「世界史A」-

- 第1次～第2次 参加しても意味がない→参加することに意味がある
 第3次 社会参加って変だ！いやだ！→社会参加は重要だ！
 第4次～第5次 私には社会参加できない→私には社会参加できる

次	次の目標	生徒の内容・活動
第1次	正義の視点を獲得する	不正義の5つの視点に基づき、蟹工船内の不正義を列挙する
第2次	参加の意味が歴史的に変わることが理解できる	蟹工船の作者・労働者の参加の意味を資料から評価する
第3次	参加の見方の転換ができる	公民権運動を3期に分け主張の内容・方法を3つの立場から評価する。
第4次	参加のロールモデルを発見できる	公民権運動の5つの社会参加者から自身が「なりうる」「なりたい」人のランキングを作る
第5次	参加するモデルを発信できる	教科書の表紙写真にふさわしい人物とそのキャッチフレーズを作成する

第2期「世界史A」 生徒の社会参加

担当：古塚



27

単元前後の変容

担当：古塚

「世界史A」を受講した単元前後の生徒の変容

生徒		生徒	プ→ポ	生徒	プ→ポ
中学生の平均	10.98 7.00 5.24	H	5→7 7→7 6→6	I	9→12 5→5 6→5
J	5→5 9→10 4→3	K	13→10 5→5 6→6	L	8→5 6→6 5→7

上段「学校づくりへの参加意欲」・中段「政治的行動への参加意欲」・下段「SNSへの社会参加経験」の質問項目への肯定的な回答ポイントを示す。各項目については、スライド4参照。

社会参加におけるエンパワメント格差には至らなかった

第2期の研究が日本版ボイテルスバツハ・コンセンサスに示唆すること

・教科の枠組みを超えて運用できる日本版を作る必要性

=定時制高校では、言語を通じた社会参加が苦手な子どもも多い。そもそも言語能力に依存する社会参加はエスタブリッシュメントのもの(!?)。音楽科で歌・ラップを通して、保健体育科でダンスを通して、情報科で二次元ポスター作成を通して、美術科で彫像を通して社会参加を認める。そのためには教科の連携が必要になる。

・リアル有とリアル無(=理想的)な社会、両方への参加を伴う教育課程を保障して日本版を作る必要性

=現実で失敗し、理想的な空間で成功する、どちらも経験させることで柔軟な社会的・政治的な展望を持たせる教育課程の必要性

29

日本版ボイテルスバツハ・コンセンサス案 (本発表=実践から)

1. 子どもをすでに社会(政治)に巻き込まれている市民として扱わなければならない(ただし、守られるべき市民としての見方も必要)
2. オフラインだけではなくオンライン空間も社会(政治)の射程に入れるべきである
3. リアル社会(意見が聞いてもらえず、炎上するエスタブリッシュメントな社会)とリアルではない理想的な社会(意見が聞いてもらえて、理想的な発話状態のあるクラスや鍵付きツイッター等)両者に参加する機会を保証しなければならない
4. 社会参加の方法の多様性を重視しなければならない。言語に依存しない社会参加を積極的に取り組む必要がある
5. これらは特定の教科だけではなく教科横断的もしくは学校全体の取り組みとして守られる原則である

30

【参考文献】

- Ekman and Amnå (2012) Political participation and civic engagement : Towards a new typology. *Human Affairs*, 22 , pp.283-300.
- Levinson K, M.(2012) *No citizen left behind*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- 古田雄一(2019)「米国イリノイ州シカゴ学区の市民性教育改革の方法と特質－格差是正に向けた学校全体での市民性教育実践の先駆的事例－」『国際研究論叢』33(1), pp.69-84.
- 唐木清志(2010)『アメリカ公民教育におけるサービス・ラーニング』東信堂.
- 唐木清志・寺本誠(2007)「中学社会・公的分野におけるサービス・ラーニング実践－単元『地方自治と路上喫煙・ポイ捨て禁止条例を事例として』」『中等教育研究』26, pp.57-70.
- 久保園梓(2020)「アメリカ社会科におけるパワーを中核に据えた市民的関与の学習－シカゴ学校区公民科モデルカリキュラム“Participate”の分析を手がかりとして－」『社会科教育研究』141, pp.104-117.

社会参加を促進する教育課程をいかに作り出すか － ある定時制高校の実践から －



終

5. プロジェクトメンバーによる自己省察

【小栗優貴の振り返り】

私の指導教員である草原和博先生に、自身が研究する「社会参加カリキュラム」について報告をしていた際に「小栗さんは、定時制高校を知っていますか？あなたの問題意識と実は関わる学校かもしれません。」と問われたのが本プロジェクトの始まりだったように思う。恥ずかしながら、その当時は、定時制高校についてよく知らなかったし、質問の意味が十分にわかっていなかった。指導を終えてから、パソコンや本で「定時制高校」について調べた。定時制高校については、多様な背景を持つ生徒が集まる学校であることなど一定程度理解でき、多くの先行研究があることを確認した。しかし、主権者教育についての定時制高校の取り組みは、なかなか見当たらなかった。

そのときに先の問いの背景には「主権者教育や社会参加カリキュラムの改革をすべきなのは、多様な背景を持つ生徒がいる定時制高校なのでは？」というニュアンスが含まれていることにやっと気づいた。草原先生の問いによって、「エンパワメント格差」という視点で主権者教育の再構成を図る志、定時制高校の主権者教育を再構成する志を持ち始めたのである。そこからは、私の希望もあって、草原先生に実践を開発・実施するプロジェクトをしたいと申し出→香風高校の当時の校長先生である石川照子先生を紹介してもらい→実際に研究を実施するというように発展していった。

第2期を終えた今、率直な感想として以下のことを考えている。

1つ目は、エンパワメント格差を是正するのは、非常に難しく、学校全体でのアプローチが必要になることである。参加意欲を減退させている生徒は、家庭・学校・地域等で社会参加の意欲を削られており、それに対抗するためには、一教科や複数の教科が構造改革されるだけでなく、学校全体の構造改革が必要であることをデザイン研究から学ぶことができた。

2つ目は、学校全体の主権者教育の構造改革のために、問題意識を共有し、知見を提供し合うチームが学校内外部に必要になることである。今回、研究メンバーが多種多様(大学教員・校長・大学院生・教諭)になったこともあり、知見を提供し合うという点を重視するデザイン研究の良さが表出したように思える。開発を研究者が、実践を実践者がといった分業論を超えることで、よりデザイン原則が洗練化していく状況を確認できた。デザイン研究という方法論が主権者教育の理論と実践をつなぎ、構造改革を図る上での大きな手がかりとなることを学ぶことができた。

3つ目は、「市民としてのエンパワメント格差」を問題意識にして研究する際に、「格差」があると判定する際の眼差しを疑い続けることの必要性である。本プロジェクトを終えてから「格差」があると判定する評価規準がマジョリティ側に置かれがちであることに気づかされた。定時制の高校生は、本来私(たち)が用いた評価規準である「社会参加」はしていなくても、別の「社会参加」をしているのかもしれない。つまり、「選挙に行く」「SNSで発信する」「デモに行く」という社会参加だけではなく「歌を歌うことで、社会に対して発言する」「不買運動をしてみる」「アルバイト先で抗議をする」等、実は見落としている社会参加があるよう推察される。「格差」が起こっていると判定する際の評価規準自体を社会が問い直していくことがエンパワメント格差是正に至る可能性を理解できた。

私にとって、定時制高校において主権者教育を実施すること、そしてその意味の探究は、まだ始まったばかりである。多様な先生方とこうした取り組みを続けていけたら、望外の喜びである。

小栗優貴(広島大学大学院・博士課程後期)

【石川照子の振り返り】 高校が大学との共同研究をおこなう意義

2020年3月に恩師である広島大学の草原和博先生から、当時、私が校長を務めていた兵庫県立西宮香風高等学校を拠点に、主権者教育のデザイン研究ができないかというご相談を受けました。共同研究の中心は草原ゼミでの私の後輩である小栗優貴さんであり、定時制高校を拠点にした主権者教育についての研究の蓄積はほぼないことから、是非、協力したいと思いました。また、定時制高校の生徒たちにとって、社会の一員として自分たちや他者の権利についての理解することや、孤立することなく社会とつながるための方略について学ぶことには大きな意義があると考えました。一方で、生徒たちや先生方にとっても何かしら得る点がなければ、校内で研究協力への理解を得ることは難しいと思いました。

西宮香風高校は、生徒が午前、午後、夜の3つの部に分かれて所属する多部制（定時制）高校です。研究の趣旨から、3部の時間帯での実践が必要でしたので、まず3部の現代社会を担当されていた北川先生と南先生に研究協力を相談したところ、快諾いただきました。次は3部の担任団の先生方への説明です。定時制高校に在籍する生徒たちは、さまざまな困難を抱えながら通学している生徒が少なくありません。特に3部の先生方は、生徒が学校生活に不安を抱き、学校から足が遠ざかることを常に心配されていました。そのため、外部の方が教室に入ってくることや研究成果の公表の際の生徒のプライバシーの保持に関して、この研究が研究倫理審査を受けていることや、不都合が生じた場合はいつでも中断できることを説明し、理解を得ることができました。生徒にも共同研究の単元の学習が始まる際に、教科担当者から大学院生と一緒に授業を行う説明を行い、了解を得ました。その経緯を全職員にも校長の私から説明し、学校全体で共同研究を受け入れる態勢を作りました。

こうして、2020年の7月から事前アンケートにはじまり、授業実践の準備を始めていたところ、新型コロナウイルスの感染拡大のため、広島県と兵庫県との往来が困難となり、授業の打ち合わせも実際の授業も両県をZoomで結んで行うことになりました。特に授業のZoom配信は、情報科の望月先生をはじめ、他教科の複数の先生方に多大な協力をいただき実現することができました。これは共同研究をおこなう授業担当者だけでなく、全職員に対して共同研究の趣旨を説明し、理解いただいていたために可能となったと思っています。ちょうど兵庫県では、2020年の夏休みに県教育委員会から高校にタブレット端末が一定数配備され、西宮香風高校でも120台余りが届いていました。これをどのように活用していくかは学校としても大きな課題であり、本共同研究は若手の先生方を中心に、授業での活用が模索されている時期と重なることとなりました。第1期の研究の北川先生の現代社会の授業ではTeamsを活用しましたが、広島の小栗さんも参加できるよう、ネットワーク管理者でもあった望月先生に設定してもらいました。

第2期の研究では、第1期の課題を踏まえ複数の教科の授業を結んでの実践を計画することになりましたが、私が定年退職することや教員の異動があったことから、現在の校長である谷口校長にこれまでの経緯と研究の継続をお願いしました。幸い、かつて西宮香風高校での勤務経験がかなりの谷口校長には、研究継続をご了承いただくことができました。そして新年度になり、新たに着任された地歴科の古塚先生、2020年度は裏方として研究支援をいただいた情報科の望月先生の授業をお借りして、引き続き第2期の共同研究が2021年に実現しました。

以上のように、新型コロナウイルス感染症拡大のなかでの遠隔地にある者による共同研究は、当初の計画を大幅に変更しながらのものになりましたが、逆にそのことで多くの先生方を巻き込むことになりました。直接・間接的に高校において実践的な共同研究をおこなう現場を先生方に見ていただくことができたことは、西宮香風高校の先生方の財産になったと思っています。同時に授業を受けた生徒たちにとっても、自分と社会のつながりについて考えるきっかけとなった授業であることを願います。

学校の教師は、日々、授業や目の前の生徒たちへの対応に追われています。様々な生徒が在籍する定時制高校ではなおさらのことです。しかし、若い先生方が多いこの学校で、研究の視点で授業を組み立てたり、振り返ったりすることの意義は大きかったと思います。何より、先生方が生徒のためにどのような授業を行うことが必要であるのかを考え、挑戦していく契機になったなら、この共同研究の意義は大きいものであったと感じています。

最後になりましたが、本研究遂行を粘り強く導いていただいた小栗さんと草原先生、ならびに協力とご理解いただいた谷口校長をはじめ西宮香風高校の先生方に心より感謝申し上げます。

石川照子（三重大学教育学部）

【北川弘紀の振り返り】

実践前の私は、一般的な認識と大きく差はなく、定時制高校の生徒は、学習への気持ちが決して高くなく、社会に対してもどちらかと言えば否定的な見方をしている生徒が多いと感じていた。しかし、実際に生徒から社会に対する思いや主張を抽出してみると、各生徒が社会に対する不満や、言いたいことを抱えていることに気づかされた。しかもその内容も、決して稚拙なものではなく、大人の目線で見ても、「確かに」と言えるような内容もあった。

しかも全日制の生徒との大きな違いは、多くの生徒がすでにアルバイトなどをしながら学校に通っており、社会の中で働くという経験を経ているという点である。本人にとっては勤労と勉強の両立は非常に大変なことで、多大な苦勞をしていると思われるが、その中でそれぞれの視点で社会の矛盾点などを認識していることを知ることができた。

「まだ高校生だから」や、「定時制高校の生徒だから」という視点を外して、一人の大人に近づいている人として、その考え方を尊重して接することの大切さや、自分がこれまでに認識して生きたことは、地歴公民科の教員であったとしても、ごく一部であったことに改めて気づかされ、今後の自身の成長の必要性を強く感じた。

今回は、定時制高校での実践であったが、社会に対して主張していくという経験や力は、すべての高校生にとって必要なことであるため、生徒の社会への思いを活かせるような授業実践を今後も考えていきたい。

北川弘紀（兵庫県立篠山鳳鳴高等学校）

【望月翔平の振り返り】

第1期には、北川先生のサポートとして携わり、第2期には授業者として本研究に携わらせて頂きました。第2期は違う立場でかかわるというお話をいただいたとき、主権者教育という

内容を、情報科という教科の中でどのように位置づけていけばよいのかすごく悩みました。しかし、授業の打ち合わせのなかで、小栗さんの授業計画に、ネットワーク世界で起こっていることや世間で話題になっている事、SNSと高校生の関係を合わせて考えてみると、情報科だからこそできるアプローチの仕方に気づくことができました。それは、誰もがSNSを媒体として主張を訴えることができるという点。またユーザーの中心となる10代20代は非常に柔軟な発想かつ新しい方法で主張をし、その発言は個人への影響はもちろん、社会を動かすきっかけになるほど強いという点です。このような観点到に気づいたとき、これまでの「主権者教育＝公民科」というような固定概念のような枠組みではなく、様々な観点からアプローチをし、学校全体で取り組むということができるようではないかと考えるようになりました。ただ、この研究内容に限らず、教科書外のカリキュラムに取り組むことは難しく、単発的になりやすいという学校教育の現状があることも事実です。今回の研究に携わった者として、様々な観点のアプローチを加えながら、中長期的に計画し現場で実践できるような授業構想をしていきたいです。

望月翔平（兵庫県立西宮香風高等学校）

【南理恵の振り返り】

①この実践を終えて得た学び

前任校から、私は「公民意識を育む」を基本の柱に据えてきた。毎授業、生徒たち一人一人と、疑問や意見などを書いたカードをやり取りした。最終的には「社会活動・政治に興味関心がある」と答える生徒が、一学期開始時点の約四倍（受け持った生徒の80%以上）になった。

現任校の西宮香風高校では、生徒がノートに書いた感想や疑問に返答をする形でやり取りをしている。期末に感想を書かせると、選挙への意欲や社会問題への関心が高まる傾向があった。ただ、科目の特性上そうなっただけとも考えられる。

そういった背景があって、私は今回の「社会参加におけるエンパワメント格差是正を目指したカリキュラム開発・実践」のメンバーに名前を連ねることとなった。だが結果として、私は実践を行わなかった。

私の担当するクラスの事情なども絡んだ結果であるが、「何をおいても、生徒たちのために、実施すべき価値がある」と感じるレベルに練り上げられなかったのも、一つの理由である。

全体として、目標とされるものが多岐に渡りすぎ、重点が不明瞭だったという印象である。達成したいポイントを絞り込み、取り上げる問題を精選する必要があったと感じる。ただ、そこまで踏み込んでいく時間も体力も、私には足りなかった。

② 子どもの社会参加をめぐる

今回の研究は「社会参加におけるエンパワメント格差是正を目指す」ものである。「エンパワメント格差が存在する」という前提は先行研究による。では、定時制高校生たちの社会参加意欲を削ぎ、無力感を与えているものは何なのか。

私は、生育環境の厳しさ、過去の経験による自己評価の低さなどだと説明を受けたが、どうにも腑に落ちなかった。社会問題というのは、まさに「そこ」に存在するものである。彼らの声こ

そが「現場」の悲鳴であり、それは発されるだけで価値がある。まずそこを強く認識させれば、彼らは声を上げる「権利」を知るのではないだろうか。

社会において決して「恵まれた」といえる状況ではない者が多数を占める西宮香風高校において、声を上げることは自分を守ることであり、と認識させることは、彼ら自身のために間違いなく必要である。

ただし、定時制高校は全日制高校に比べて授業時数が少なく、限られた時間内で何を伝えるか、よりシビアな選択を迫られる。少なくない授業数を注ぎ込み、なにかを特段強調する単元を設定することは、果たして「生徒たちにとって」相応の価値があるのか。

今回、私の判断は否だった。生徒たちが「またこの話か」と思うほど、社会参画を「わかりきった当たり前のこと」にしていく。それには特設単元の設定よりも、毎回の繰り返しこそがカギとなると考えたからである。また、こちらが気合を入れて準備をするほど、後ずさりする生徒が多いという皮膚感覚も、この決断を後押しした。さあこれから特別なことをやるぞ、という構えは、少なくとも私の担当する生徒たちには「向いていない」。あくまで「日常の地続き」として、諸問題に触れた方がいいと判断した。

生徒たちの多くにとっては、自分が触れられる世界が「想像できる限界」である。その範囲に、より広い問題を意識する契機を、可能な限り設置する。すなわち、自分と同じ悩みを抱える人がいることや、他の人たちの対処方法など、触れていなかったら世界を知る糸をつなぐ。

SNS を使いこなすデジタルネイティブ世代の彼らは、一見して世界とつながっているように見える。だが実際には、彼らは「お気に入り」に集中的にアクセスし、ニュースすら積極的に得ようとはせず、エコーチェンバーの中にいる。彼らは拒絶反応を抱くと即「ブロック」を行い、情報を遮断して身を守ろうとする。そしてますます触れられる情報を制限していく。だからこそ、情報をつなぐことが必要なのである。

「自分ひとりの問題」を「たくさんの人が共有する問題」と認識しなおすことは、きわめて重要な意味がある。むしろ、そこに一步を踏み入れられるかどうか、社会参加への分かれ目であると感じている。

南理恵（兵庫県立西宮香風高等学校）

6.おわりに・謝辞

エンパワメント格差を是正するにはどうしたらよいか。

本研究のテーマは上のおりであるが、研究を始めて数カ月、大きな疑問に直面した。学校は「是正」を促進する場として相応しいのか…という疑問である。この疑問が生まれたのにはワケがある。様々な学校での授業観察と調査結果を通して、一部の高校生は以下のような認識に規定されているのではないかと考えるようになったからである。

- ・ 授業は、基本的に苦痛な時間である。
- ・ 教師は、余計な工夫などしないでよい。
- ・ 学校は、単位と卒業資格さえ与えてくれたらよい。
- ・ 社会は、私に可能性を与える場などではなく、しばしばそれを潰してきた。

もし高校生がそのように考えているならば、学校は容易にはエンパワメント格差を乗り越える場とはなりえない。むしろ格差の再生産装置になっていると受けとめるべきだろう。学び手は、最小のコストを支払い、試験で及第点を得て（何度か追試を受けても）、商品たる卒業資格を入手し、そして特段のクレームを申し立てることもなく社会に巣立っていく。言い換えると、彼ら彼女らは、エンパワメントされることなど毛頭望んでもいないので、外部世界に耳を傾けようとしないうし、声も上げて荒波を立てることもせず卒業を目指す。しかし、市場経済は、むしろそういう意欲を減じられた、余計なことをしない卒業生を歓迎し、容赦なく取り込んでいくので、エンパワメント格差はますます拡大していく。

もちろん本研究は、このような構造に楔を打ち込むことを意図したものだった。具体的には、生徒がエンパワメントされることを歓迎するカリキュラムと学習環境づくりの原則を究明することだった。二次にわたる調査で一定の成果は得たが、それは中途に過ぎない。現時点で言えることは、①短期的には、一人ひとりの教師が不正義に向きあい、教科指導及び教科連携の充実をはかり、生徒が多様な方法と媒体で社会に向けて表現できる場と社会との関係性を築くこと、②中長期的には、教師や生徒の能力に依存することなく、組織的に①を引き出す仕組みとオープンな学校風土を立ち上げること、これらが課題となっていく。

本研究は、パンデミック下という想定外の状況で進めることとなった。研究期間の延長では、ニッセイ財団の格段のご配慮を得た。オンライン環境下で授業の観察や研究協議をお認めいただいた兵庫県立香風高等学校の共同研究者の先生方、そして率直な声を発してくれた生徒の皆さんに、心より御礼を申し上げます。関係者との対話を通して、「デザイン研究」（＝研究者と実践者が役割を分担しながら、カリキュラムと学習環境をデザインする原則を持続的に再構築する）という新たな共同研究のカタチと可能性を考えることができた。また、本研究のコーディネイト役を担っていただいた小栗優貴さんに、あらためて御礼を申し上げます。

研究代表者 草原和博（広島大学大学院人間社会科学研究所）

EVRI 研究プロジェクト叢書 Vol.5

定時制高校における主権者教育の
構造改革のためのデザイン研究

発行日 2021年12月28日

編著者 草原和博・小栗優貴・石川照子・北川弘紀・
望月翔平・古塚明日人・南理恵

編集 広島大学教育ビジョン研究センター (EVRI)

印刷 (株)ニシキプリント



**EDUCATIONAL
VISION
RESEARCH
INSTITUTE**